

42163

教科書文庫

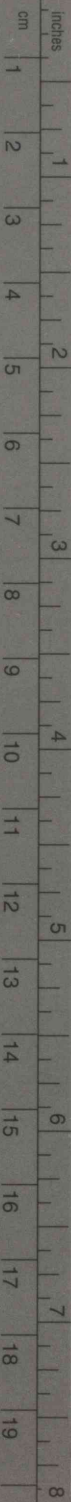
4
810
42-1922
200030
1951

Kodak Gray Scale



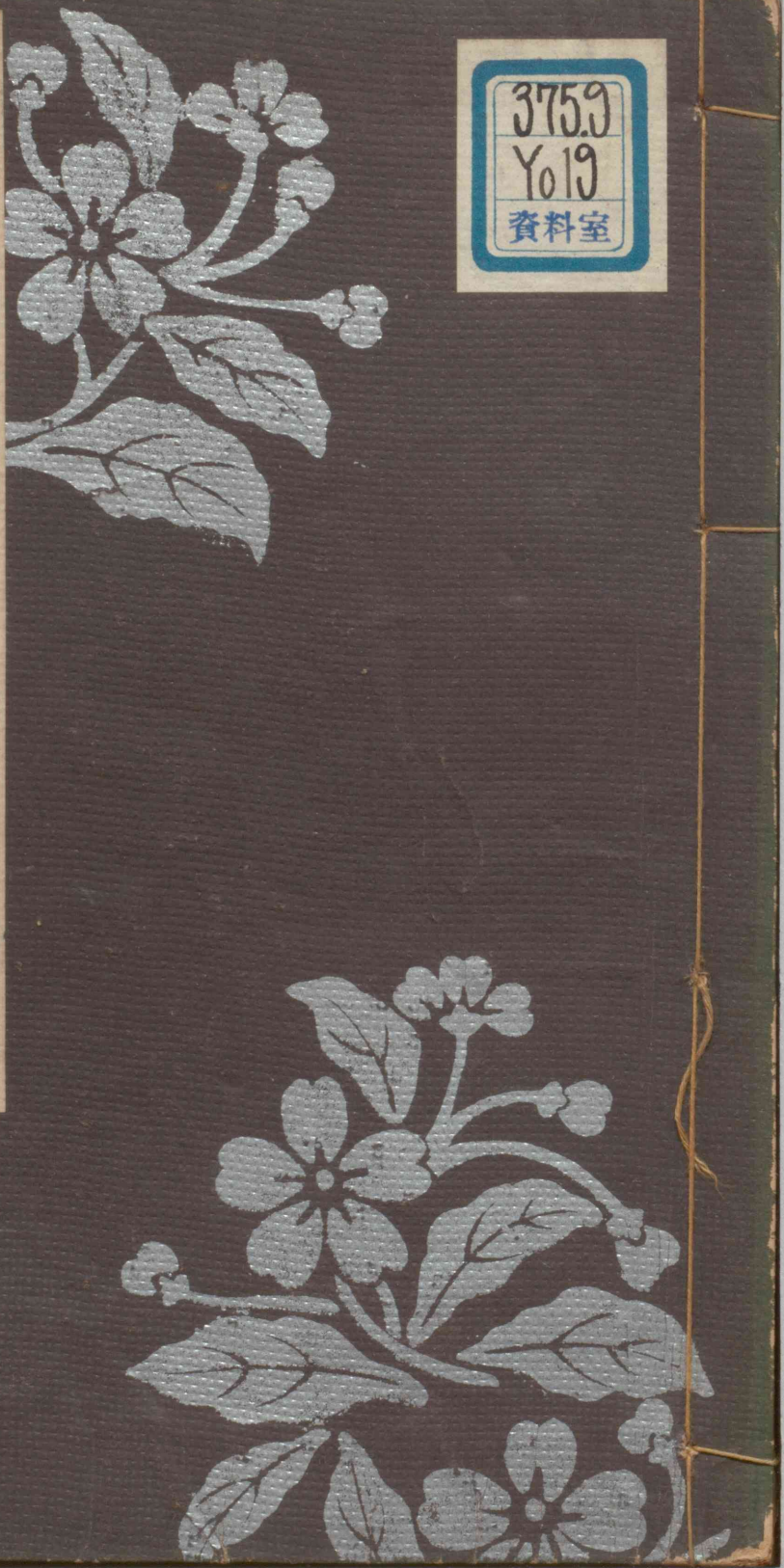
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Y019
資料室

訂五
女子國語讀本

卷二



資料室

大正十一年一月廿八日

文部省檢定書

高等女子學校國語教科書

375.9
Y019

高等女子學校西組

吉田彌平 篠田利英 共編
小島政吉 岡田正美

訂五 女子國語讀本 卷二

東京

金港堂書籍株式會社



訂五 女子國語讀本 卷二

廣島
大正十一年一月廿八日
皇后宮の御淑徳

一	皇后宮の御淑徳	大町桂月	一
二	金剛山	澁川玄耳	二
三	大阪城	西條八十	六
四	かなりや	金子元臣	八
五	瓜生岩子	德富健次郎	三
六	永代橋		三五
七	村の秋		

目次

八	おとゝえ	大和田建樹	七
九	卑下		三九
一〇	東郷元帥の母堂		四〇
一一	頓智救命その一		四〇
一二	頓智救命その二		四一
一三	自由の神		四二
一四	泉岳寺	大町桂月	四二
一五	北地の冬	五十嵐力	四三
一六	歳暮感懐	中邨秋香	四三
一七	一年ノ計		四三

一八	田舎の祖母に	樋口一葉	四四
一九	孝女いちその一		四六
二〇	孝女いちその二		四六
二一	名人團平		四六
二二	氷の諏訪湖	吉江孤雁	四七
二三	深海	飯島魁	四八
二四	ペンギン鳥	杉村廣太郎	四八
二五	公子の躰方	徳川齊昭	四九
二六	安宅	坪内雄藏	四九
二七	雛祭の記	高濱虚子	五〇

二八 山彦……………大隈言道 二六

二九 豪商と碩儒…………… 二九

三〇 樂しき我が家…………… 二七



五訂 女子國語讀本卷二

一 皇后宮の御淑徳

皇后陛下のなほ御幼少におはせし頃の御逸事を洩れ承るまゝに、一つ二つ左に記し奉りてん。

陛下には夙くより御儉素をこのませられき。御服装の如きも、極めて御質素を旨としたまへば、侍女などの、かくては餘りなるべければ、今少しは、など勧めまゐらすることもありつれど、いつも用ひさせたま

一 皇后宮の御淑徳

はざりき。あるとき、御同級の御學友と打連れて何處へか出立たせたまふことありしに、誰言ひいづるともなく、いでたちは同じくするこそよけれ。とて、衣服はしかぐ、髪はかくくとかたらひしを、かくと聞かせたまひて、暫し打案じたまひしが、やがて、衣服は如何なるものにてよからん。ことさらに好みて新なるものをせんは益なき事ならずや。とのたまひければ、みなくげにもと心づきて、いづれも御旨に従ひたてまつりきとなん。

是も猶九條家におはしまし、程の事なり。仕うま

つれる者どもの起きいでて、雨戸繰りあくる頃には、必ず御起床あらせられ、直ちに御手水を召すを例としたまへり。ある時、例の如く早く起きいでさせ給ひけるに、折しも、日の出いと遅き冬の頃なりければ、やうく御湯釜の下を焚きつけしばかりにて、御湯は未だ日向水ほどにもあたゝまらざりしかど、つゆ厭はせ給ふ御氣色もなく、そのまゝ、汲取りて用ひさせ給ひしかば、仕うまつれる者どもいと畏みて、其の翌朝はつとめて夙く起きいで、御湯を沸しまゐらせける程に、早くもそれと知しめされて、我が身一人の

爲にかく人々を勞せしめんこと心苦し。とて、其の後
は、起きいでたまひても、直ちには御手水を召させ給
はざりしかば、仕らまつれる者ども、いよく、畏みて
ありがたき御心に感じ合ひけりとぞ。

さるほどに、宮中に入らせたまふべき御内議既に定
まり、學校も御退學あそばさるべき御都合となりし
に、御父道孝公、宮中に入らせられんには、學校の人々
も容易く拜謁は叶ふまじ。されば、此の際、御教授に
あづかりつる人々を招きて御告別あらせられ、かつ
は、日頃の勞をも謝したまはんこと然るべくや。と思

細川潤次郎。

下田歌子。

召して、そのよしを聞えまゐらせられしに、いたくそ
の御志を喜ばせたまひて、同じくは幼き頃よりの師
をも。と望ませたまひければ、やがて、思召のまに、
取計らはれ、明治三十二年十月二十九日と云ふに細
川華族女學校長、下田學監を始め、小學部の職員に至
るまで、残りなく御邸に招かせられたり。かくて、席
上親しく御告別の御詞あらせられ、かつ、御記念とし
て、御手づから貴き御品を下し賜ひ、また、曾て御教育
には與りながら、すでに亡き數に入りし人々の、此の
御席に陪せざるをば、のこりをしうあはれに思召さ

れ、其の人々の遺族に對しては別に若干の御目錄を
 さへ遣はしたまひぬ。實にや、師弟の契こそあれ、此
 の時を限として、互に雲上地下と隔たりぬべければ、
 御別を惜ませたまひしも御理りなるが、さるにても、
 御身既に貴くしてなほ能く人に下りたまひ、たゞに
 眼前の人々を愛したまふのみならず遙かに泉下の
 者までをも御心にかけさせたまへる御志、まことに
 ありがたききはみところを申すべけれ。(垂徳餘聞に據る)

(一) 朝鮮第一の名
 山。江原道の東
 海岸にあり。
 (二) 文章家の
 名は芳術。

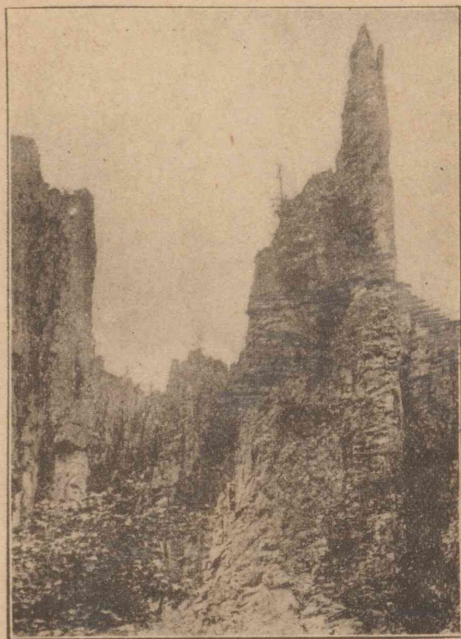
二 金剛山

六 町桂月

人若し「金剛山は富士山と比較して如何」と問ふ者あ
 らば、余はまづ答へて曰はん、「富士山は正々堂々の極
 なり。金剛山は奇々怪々の極なり」と。富士山は火
 山なるが、金剛山は火山に非ずして、花崗岩の山なり。
 しかも一萬二千峯皆山骨を露出す。金剛山一に皆
 骨と稱す、露骨に失する嫌はあれども、極めて適切な
 り。到る處に奇巖立ち、怪石横たはりて、石門もあり、
 四方何處より見ても數千萬の箱を積上げたる如き
 もあり。筍の如きもあり、塔の如きもあり、屏風の如
 きもあり、人の如きもあり。

全石を底とするは溪流としては稀には見る所なれども、金剛山中には到る處に之ありて、嘗に全石を底とするのみならず、その全石は兩側の絶壁にも及び、しかも絶壁高く、溪も大にして長さ十數町に達せるもあり。磐石の瀧壺も、小瀑には見ることもあれども、大瀑には見難きものなるを、金剛山には直下十餘丈の大瀑の瀧壺の徑五間もありて、圓形をなし、水澄めるに、底の見えざるまでの深さを有して、恰も人工にて剝りたるが如きもあるなり。皆骨とはいへども、巖は皆松を帯びたり。一にまた

蓬萊山と稱するも、言ひ得て切なるかな。松は黒松の外に、朝鮮松と稱する一種の松多し。葉は五葉な



朝鮮金剛山萬物相

れども、普通の五葉松・赤松・黒松の如く黒ずまずして、鮮かなる青色を帯び、其の實は拳より大にして食ふべし。金

剛山は巖の山と云へば、巖の山なれど、松の山と云へば松の山なり。又、楓の山と云へば楓の山なり。楓

の多きこと天下に稀なり。金剛山一に又楓嶽かまと稱す、眞に其の名に負かず。櫻もあり、躑躅もあり、自然生の芍薬もあり、又自然生の人参もあり。人参一箇その價二百圓にのぼる。それを得んとして、山中に分け入るものも少からず。金剛山は天下の絶險なれども、山中到る處、人參掘の足跡を印せざるは無しと聞く。重石の多きことも世界無比なり。三井にては出張所を置きて山北より發掘す。山中の寺々も、山水に風致を添へ、且登攀者に宿泊の便宜を與ふるが、懸崖に懸り、深山の奥に孤立するなど、よくも思

三日浦。

ひ切つて斯る處にと、人をして一驚を喫せしむ。温泉といふ天恵もある上に、湖水の趣も賞すべく、自然美の粹、鍾つて金剛の一山に在り。余は日々巡覽して三週間に互りたれども、なほ餘裕あらばと思ひたりき。
(中央公論)

名は柳次郎。著述家。

三 大阪城

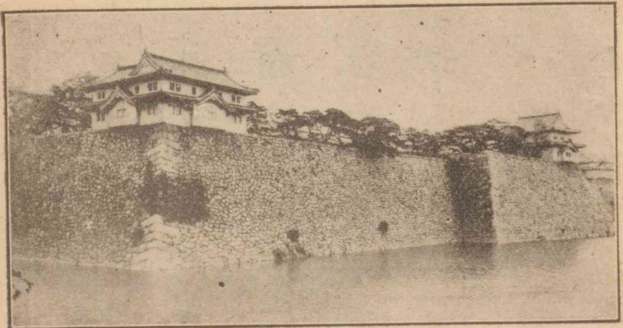
澁川玄耳

日本第一の出世をした、日本第一の寛濶な殿下様が築かれた日本第一の堅城は此處大阪城。それが日本第一に早く亡びた幕府ぢやから頗る妙。梅の、桃

の牡丹の、藤の、百日紅の、木槿の、山茶花の花のいろいろに比べて、豊臣家は櫻の様ぢや。ぱつと咲誇つて、けろりと一夜の嵐に散果てた。

源平・北條・足利・新田・織田・徳川は、本家なり、分家なり、それぞれゆかりが残つて、公侯・伯子・男爵の華族として今の世にも血統を留めてゐるけれども、豊臣家ばかりは、榮も、辱も、軍書の外に何も残らでさつぱりしたものでぢや。

第四師團の正門に差掛る爪先上り、番兵が立つてゐる。誰何する。名刺を出す。某部の某將校に面會



大 阪 城

と斷る。門を潜つて右手に番兵の頭が居る處に行くと教へられる。其處で又名刺を出して用向を申し述べる。番頭が帳面を繰展げて、何か認めて、兵を一人案内に出してくれた。第二の門を潜る。電光形に幾度も曲つて行く。案内の兵はさつさと先に立つて行く。短い劍がべたくくと腰を打つ

「もしく」と呼べば、兵は立停る。

「何でありますか。」と切口上が當世の武者言葉と見える。

「真田幸村の堅めた處は何處で御座いませう。」
「分りません。」

「向ふの石垣に穴が有るのは何で御座います。」
「あれは銃眼であります。銃を託して射撃する處であります。」

「さやうでありますか。彼處から撃てば、何處までときますか。」

「小銃でも二千米は有効なる射撃が出来ます。速

射砲でありますと、八千米は確實なる照準が出来ます。」

第三の門を潜れば廣場が有つて、大きな役所がある。兵はわしらを玄關外に待たせて一人中に這入つて了つた。

見廻せば樹木もある、芝生もある。度々の戦争に焼けたのか、大木といふ程のものは無い。石は評判通りに大きい。一つで五間も十間もあらう。仰山なものぢや。此の石一つ運ぶに、とても千人や千五百人の力では運べるもので無い。よし何千人掛つて

も一日に五町とは動くまいに、此の大きな城を築き上げる夥しい石をようも寄せ集めたもの、殿下の威光といふは偉いものぢや。若しもわしらの村で此の石一箇を百里も遠方から運ばせられたならば、三百戸足らずの瘠村では、男總出で以て二三代はかゝるに違ひない。想へば恐しいことぢや。(日本見物)

*
文學者。

四 かなりや

唄をわすれた金絲雀は
うしろの山に棄てましよか。

*
西條八十

いえく、それはなりませぬ。

唄をわすれた金絲雀は

背戸の小藪に追ひましよか。

いえく、それはなりませぬ。

唄をわすれた金絲雀は、

柳の鞭でぶちましよか。

いえく、それはなりませぬ。

□ かなりや

唄をわすれた金絲雀は

象牙の船に銀の櫂、

月夜の海に浮べれば、

忘れた唄をおもひだす。

(鸚鵡と時計)

*國文學者。

五 瓜生岩子

*金子元臣

瓜生岩子の慈善は貧者・窮者に對して單に財物を施すのでなく、其の本に培ひ、心を救つたのである。明治二十一年この方、會津地方に毎年洪水があり、米價は彌益しに騰貴して、細民の難澁一方でなかつた。

*東京府小石川區
にあり。

岩子は借財までして、救助に骨折つた。この折、ふと水飴の製造法を改良し、從來全く廢物としてゐた飴の搾糟で一種の立派な食品をつくることを發明した。これが爲に飢を免れた者が數知れずにあつたといふ。一體岩子は常に節儉を旨とし、自分の衣食は唯飢寒を凌ぎ得れば足れりとし、世の廢物はどんな物でも工夫して有用の物とすることを心掛け、平生心を細かな事に配り、些細な物をも捨てなかつたが、到頭この發明を成し遂げたのである。明治二十三年の頃、東京養育院から招かれて、幼童の

*昭憲皇太后。

世話掛となり、其の心を籠めて造つた飴糟臺の菓子
を皇后陛下に奉つた。ところが、畏くも御満足との
令旨を賜はり、その上、九重の大奥に召されて、多くの
女官達に飴糟から菓子を製造する方法を傳授する
といふ光榮を得た。

徳、孤ならず、岩子の徳行を慕ふ者が故郷に段々殖え
て、岩子を會津へ迎へたいといふ聲が次第々々に高
くなつて來た。それで、岩子は遂に故郷に歸つて、各
郡に育兒所を立てたり、又、若松市に慈惠病院を設け
たりした。その後、瓜生會といふ會を創めて、普く縣

*東京市下谷區に在り。

下の人に飴糟の利用法を傳授したので、縣民は頗る
其の益を受けた。この上は、この方法を廣く全國に



(園公草淺) 像銅子岩生瓜

傳へようといふので、明治二十七年ま
た上京して根岸の里に住居を定め、自
ら賄費を辨じ、多くの入費を出して多

くの人にこの法を傳授した。

程なく二十七八年の戦役が起り、世間は皆恤兵、後援

の事に忙しく、岩子も手の届くかぎり奉公に努めたが、この慈母の眼に絶えず哀と映つたのは貧民の情態であつた。戦争以來、日にまし寒さに泣き飢を訴へる聲が耳について、夜の日も合せられぬ。救濟のことを有志の誰彼に謀つたが、折が折とて、心に任せぬ事ばかり。とつおいつ、思案に暮れたが、或時、焼芋屋の前を通つて、ふとその切屑が籠に澤山積上げてあるのを見、豚の餌食になる位が關の山で、多くは廢物となるのを残念に思ひ、何がなと工夫を重ね種々の經驗を経て、遂にこれから飴をつくり、又、焼酎や葛

粉を拵へ、その糟でかて飯を炊く方法を發明した。これも亦世間一般の人に告げ知らせて傳授したので、今では之を職業として生計を立て、居る者が少からずあるといふ。實に皇國の廣き、行末の長きを考へれば、この爲に食を得るものが幾萬人の多きに上るか料り知られぬ。さて、この芋飴を赤十字社病院で分析して見た處が、誠に結構な滋養品であつたので、岩子は大いに喜び、陸軍衛戍病院、赤十字社、育兒院等に贈つて、施にした。

又、この役の折、畏くも時の皇后陛下を始め奉り、女官

*土方久元夫人。

貴婦人方は宮中で繙帶卷をなされたが、その裁屑は積んで山をなした。その裁屑は土方伯爵夫人の盡力で殊に岩子に御下附の事になり、宮内省の馬車で根岸の住宅に送り届けられた。岩子は思も掛けぬ恩恵に浴し、この千載一遇の時に、大御手を觸れさせられた物を賤しき身に拜受した上は、後日の記念となる物を造り、子々孫々に天恩の廣大なるを語り繼ぎ言繼ぐ料としようといつて、苦心の末、之を解きほごして絲にし、再び之を織立て、皇后陛下の御歌を染出して記念織と名づけた。そして、猶これを、軍人

西郷従道夫人。
大山巖夫人。
土方久元夫人。
樺山資紀夫人。
三島彌太郎夫人。

の寡婦で貞節ある者、或は、婦徳の世に秀でた人に贈つて、一は哀悼の情を表し、一は後世の鑑にしようと
いふので、西郷・大山・土方・樺山・三島等の諸夫人に謀つて、東京瓜生會といふを設け、かの記念織に銀杯を添へて、府縣知事の手を経て贈つたものが全國で三千餘、残りには神社・佛閣に納めた。皇國の爲、國民の爲、教育の爲、岩子の考案は實に立派なもので、後の世に及ぶ影響は尠からぬ事であらう。
(新體婦女鑑)

六 永代橋

深川富岡八幡宮の神事は、江戸にては山王・神田の兩祭に次ぎての祭禮なりき。

文化四年八月十五日は、其の神殿新に成り、三十餘年間中絶したりし祭禮を行はる。氏子各町の意氣込大方ならず。各競うて山車を出しなどす。

この事早くも府内の評判となれる折柄、深川靈岸町には、身延山の開帳ありければ當日の雜沓さこそと思ひ遣らる。

待ちに待ちたる十五日は、生憎の雨天に延期となり、愈十九日祭禮は舉行せらる。此の延期の爲に人氣

は一層盛になりて、府内の老若男女、早朝より我も我

もと永代橋の方へ押行く。

永 晝すこし前ごろ橋下を通る貴

代 人の船あり、番人、繩を橋の袂に

張りて一切諸人の通行を許さ

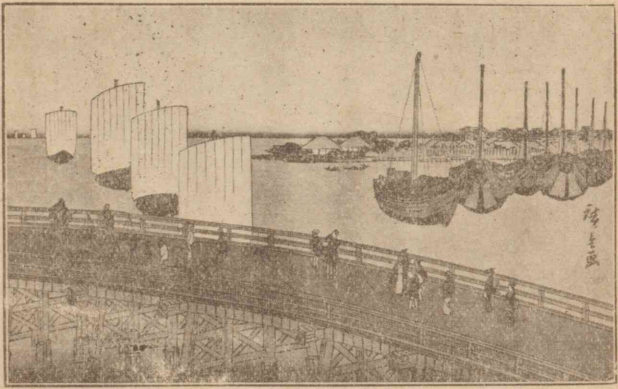
橋 ざること小半時。此の間北よ

重 り、南より、橋の西詰に來り集る

(筆) 者、宛ら雲霞の如し。やがて番

人の繩を引くと齊しく、待詫び

たる幾千萬の大衆、潮の涌くが如くに、どつと橋上に



押寄す。折も折、一臺の山車、橋東を通過すれば、橋上の男女、それ山車と、わつしよく、足を空に押行く。細く長き假橋の争でかかばかりの重量に堪へ得べき、忽ち橋の東詰一間を残して長さ十二間許り、めりめりと二つに折れて、どつと水中に崩れ落つ。數百人の男女橋と共に轉び落ち、浮きつ沈みつ悲鳴を揚げて救助を叫ぶ。

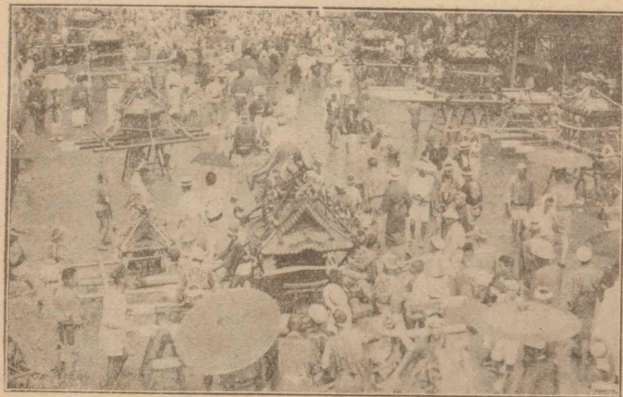
橋上の男女、これほと驚きて引返さんとす。されど跡よりく、押寄せ來りて、止めんに由なく、續いてぞろぞろと落込む者夥し。此の日より翌日に掛けて、

溺れしものを引揚げたるは總數實に七百八十人、其

の内、四百四十人は遂に蘇生せざりきといふ。

永代橋の墜落に就いては種々の悲劇と與に又種々の喜劇もありたり。

本郷に住める麴屋の主人、祭禮を見んとて、兩國橋の此方、米澤町より村松町に差懸りし時、ふと心付けば、懐中の紙入、何時の間にか紛失して見え

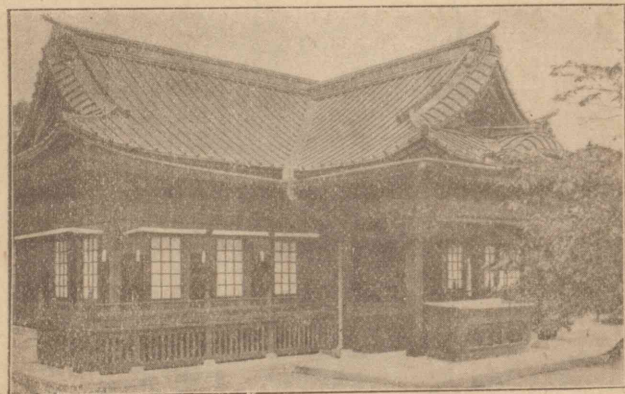


深川八幡の祭禮

ず。「扱は掬兒に取られしならん、二兩二分の金、取られては祭見ても詮なし」と思ひ、本意なくも、其の儘歸宅して自棄半分に打臥せり。夕方に至りてふと目を覺せば、人々の語り罵る聲々耳にかしまし。怪しみ問へば永代橋の墜落にて、時刻は恰も我が渡りたるべき刻限に當れり。

僥倖にして死を免れたるを喜びしに、翌日、突然、奉行所より、主人の死體引渡すべければ、早々出頭すべき旨の命あり。合點行かずと出頭し、自分は此の通り存命なる由申し立つれば、然らば此の品物に覺無き

か」と彼の紙入を示さる。改むれば二兩二分の金子



深川八幡神社

も昨日の儘なり。主人は昨日拘られし事の由を述べれば、役人は横手を打ち、それにて讀めたり。此の紙入、あれなる屍體の懷中に在り、中を検すれば、其の方の住所氏名を記したる書付のありたれば、正しく其の方の屍體ならんと思ひしに、さては、彼の者、其の方の紙入を掬取り、其の儘深川へ赴く

途中、橋梁墜落の爲、横死を遂げたるものならん。好し好し、懷中物は其の方に下げ遣はす。といはる。主人は一命は助かる、金子は戻る、有り難しく、とて其の冥加を喜びたりといふ。
(江戸懷古錄に據る)

七 村の秋

徳富健次郎

秋は農家の祭日、大事な交際季節である。風の心配もどうやらからうやら通り越して、まづ收穫の見込がつくと、何處の村でも祭をする。木戸錢不用千客萬來の芝居、お神樂、それが出来なければ、詮方をしのお

*文學者。嘗て盧花と號す。

*作者の居村千歳村の字。東京府北多摩郡。

神酒祭。今日は粕谷、明日は廻澤、烏山は何日で、給田は何日と、皆が指折り數へて浮立つ。彼方の村では太鼓が鳴る、此方の字では舞臺掛け。一村八字寄合つて、大きくやればよささうなもの、八つの字には八つの意志と感情と歴史があつて、二百戸以上の烏山は素より、二十七戸の粕谷でも、十九軒の八幡山でも、各自に自家の祭をしなければ氣が濟まぬ。祭となれば、どんな家でも強飯を蒸す、煮染を拵へる、饅頭を打つ、甘酒をつくる。そして、他所の親類縁者を招く。今日は此方のお神樂で、平生は眞白な鳥の

糞だらけの鎮守の宮も、眞黒になるほど人が寄つて、小間物屋菓子屋・鮎屋おでん屋水菓子屋などの店が出る。神樂は村の能狂言、神職が家元で、村の器用な若者等が神樂師をする。無口で大兵な鐵さんが、氣輕に太鼓を打つたり、氣輕な亀さんが、髮髯蓬々とした面を被つて、眞面目に舞臺に立ちほだかる。「あ、ありや亀さんだと、まあ」と可笑盛りのお島が笑ふ。

今日自家の祭に酒に酔うた仁右衛門さんが、明日は透綾の羽織でも引つかけて、寸志の紙包を懐中して、隣字の芝居へ出かける。毎日近所で顔を合せて居

ながら、畑の畔の立話にも、「今日は」「今日は」と抑、天氣の挨拶からゆるくと始める田舎氣質で、仁右衛門さんと、隣村の幹事の忠五郎さんとの間には、芝居の科白の受取渡しよろしくと云ふ挨拶が、鄭重に交換される。輪番に主になつたり客になつたり、呼びつ呼ばれつ、祭は村の親睦會である。祭が繁昌すれば田舎は長閑である。

稲の秋となる。地は再び黄金の穂波にあかるく照り渡る。早稲から米になつて行く。性急に百舌鳥が鳴く。日が短くなる。赤蜻蛉が夕日の空に數限

りもなく亂れ飛ぶ。柿が好い色に照つて来る。あ
る寒い朝不圖見ると、富士の北の一角に白いものが
見える。

雨が續く。雜木林に茸が出る。野ら仕事をせぬ腰
の曲つた爺さんや、赤兒を背負つたお春つ子が、箆を
抱へて採りに来る。檜茸しめぢ、稀には紅茸、初茸は
滅多にない、多いのが油坊主と云ふ茸だ。一雨々々
に氣は冷えて行く。田も林も日々色づいて行く。
茶の花が咲く。雜木林の檜にからむ自然生の蔓の
葉が黄になり、藪からさし出る白膠木が眼ざむる様

な紅になつて、お納戸色の小さなコップを幾つも列
ねて龍膽りんだんが咲く。(みゝすのたはこご)

ハ おとゝえ

大和田建樹

*國文學者、歌人。
明治四十三年歿す。

一

夕日かけ 里をわかれて、
松の上に なほぞやすらふ。
今日ひとひ 小田におりたち、
刈りし稻 たばにつくりて、
負ひもちて、 家路にはこぶ

賤の女が、
 歸りゆく
 うちまねく
 烟たなびく。

おと、えつれて
 方も知られて、
 す、きの奥に

二

沈む日の
 うす墨の
 つ、まる、
 ほの見ゆる
 おと、えの

なごりも消えて、
 ゆふべの色に
 遠のひとむら
 焼火のかけに、
 少女、ち、は、

むつましく、
 箸とりて
 圍爐裏火に
 あた、かに
 刈りのこす
 風寒く吹く。

神のめぐみの
 夕げやすらん、
 柴折りくべて
 圓居やすらん、
 稻穂のうへに

九 卑下

脈

ある處に我が身をむやみに卑下する下女あり。そ

の家の内儀、風を引いたりとして、常にねんごろなる醫者を呼びて、脈を見て貰はるゝ序に、下女を呼びて、そなたも心地がすぐれぬといやる。先生に見てお貰ひなされ」といへば、かの下女例の卑下して、なんの私等風情に脈がござりませう」というた。(輕口浮瓢筆)

傘

傘を張りならひ、七八本張上げしが、油引いてから一本もすぼまらず。これはつまらぬとむりに疊めば、ぱりくくと裂ける。どうしたもののぢやと困りしが、折柄の夕立。「しや、よい思付がある」と、傘をひらいた

まゝ、辻へ持つて出で、それ廉い、負けた、負けた」と賣りかけしに、何が、俄雨のことなれば、大勢集り、ばひあふ様に買うてゆく。「こりや、うれしや」と内へ走り歸り、「思付をやつて傘を残らず賣つて來た」といへば、隣の人が、「それはよかつた。いくらに賣つたぞ。」「南無三、餘り急いで錢をば取らずにやつた。」(落語選)

壺

粗忽者壺を買ひにいつた處がうつぶけてあるを見て、此の様な口の無い壺があるものか」と云ひながら、ひつくりかへして、「これく、底も抜けて居る。」(落語選)

一〇 東郷元帥の母堂

文久三年六月、英國軍艦の鹿兒島を砲撃せんとせし時なりき。十五歳以上の男子は、みな出でて軍に従ひ、老幼・婦女は悉く難を戶外に避くるなど、さしも尙武の聞え高かりし薩藩も、この未曾有の大變に、上を下へと騒ぎ合へり。二十八日、砲聲、灣の一方に轟くよと思ふ間もなく、劇しき戦闘始り、夜に入りてなほ止まず。折しも、暴風吹きすさび、大雨盆を覆すが如く、すさまじさ言はんかたなき中を、大鍋片手に提げ

*鹿兒島藩主。

て急ぎ足に来る一婦人、提灯は破れ傘は裂けて、雨の衣にしたゝるをもともせず、あやめもわかぬ闇路をたどりて、つひに城外二里ばかりなる齊彬公の廟所南洲院に到り、大鍋の中なる薩摩汁を戰士にすゝめて、その勞を慰めたり。この婦人こそ東郷元帥の母堂なりけれ。

元帥の生れしは母堂が三十九歳の時なりき。元帥に二人の兄と一人の弟とあり。元帥の母堂の束の間も忘れざりしは、この四人の男兒をして、一朝急變有らん時、君國の爲に拔群の功名を立てしめんと

一事なりき。されば、四兒の前途につきては、常に神佛の加護を祈り、寝ぬるにも起くるにも、髪結ふにも衣着するにも、すべて人手をからず、かりそめにも吾が子を輕んぜず、又、吾が子をして自ら重んぜしむるやう真心こめて養育しけり。

明治元年。

明治戊辰の際には、兄弟四人皆出でて會津征討の軍に従へり。母堂は一人薩南に留守居して、愛兒の武運めでたかれと祈りしかひありて、四兒皆それぐ武功を立て、錦を故郷に飾る身とはなれり。然るに、不幸なるかな、末子は凱旋の途に病歿しければ、知る

者惜しみ嘆きて、弔慰の客ひきもきらず。二十年の永き年月心を碎きて、あつばれ男兒にしたてんもの



東郷元帥母堂

をとほぐくみたりし母堂の悲はいか許りなりけんを、すこしも之を色にあらはさず、末子の不幸はもとより弔はではあるべからねど、國の爲

に忠勤を抽んでて武運めでたく凱旋したる三子の冥加も祝はざるべからず。悲の爲に喜ぶべき事も忘るゝが如きは我のせざる所なり。とて、朝には末

子の爲にいとも鄭重なる葬儀を營み、午後には廣く親戚知人を招きて、凱旋祝賀の宴を張り、以て元帥等遠征の勞を慰めたりといふ。

元帥の母堂は、その後、西南戦役に於て次男壯九郎氏を失へり。陣中混雜の際なりければ、取敢へず骸を菰にて捲き、その上を毛布にて包みて、城山に埋めたりしが、亂平ぎて後、母堂みづからその地に赴き、親しく亡兒の遺骸を掘りおこし、改めて埋葬する事とせり。されど、愛兒の死骸に鋤、鍬の類を觸れしめんことは、君國の爲に子を重んずる我が豫ての志にそむ

かんとて、みづからの手して土を掘り、石を除き、指の傷つくをもいとはず、血の流るゝをも意とせずして、掘りおこし、死屍を淨めて埋葬し、祭祀を營みてその冥福を祈りき。

二十七八年戦役の起るや、元帥は浪速艦長として豊島沖に敵艦高陸號を撃沈めて、幸先よく第一の勝利を得たりければ、祝勝の歡聲全國に鳴りひびけり。この時、母堂は家人を誡めていへるやう、それ戦は一勝を以て喜ぶべからず、必ずや全局の勝利を得て事鎮定に及び、いよく凱旋してこれをわが門前に迎

ふるまでは、決して意を安んずべきにあらず。とて、少しも浮きたる態度なく、ひたすら最後の勝利を祈り、八十六歳の老體を以て水垢離をなし、朝夕祈願をこめて一日も怠ること無かりきとぞ。
(婦人世界に據る)

一一 頓智救命 その一

昔、英國に、⁽¹⁾ジョンと申さるゝ王ありけり。性残忍にして、思ひやりの心なかりき。その頃、⁽²⁾カンターベリ一の町に、老僧正あり。壯麗を極めたる僧院に住し、驕奢至らざる所なく、日々百人の貴人を集めて饗應

⁽¹⁾ 1167-1216
⁽²⁾ ロンドンの東南六十二哩ばかりにあり。

し、華美に装ひたる武士をして侍らしめたり。

ジョン王これを聞きて大いに怒り、僧正を召し、叱して曰く、朕が領内に在るものは、何人たりとも朕に勝れる生活を爲すべからず。汝これを知らざるか。僧正對へて曰く、微臣只樂を朋友にわかたんと欲するのみ。且、臣は臣が所持の物を費すのみにて、少しも累を他人に及ぼすにあらずと。王、聲を勵まして宣ふやう、凡そ朕が國土にあるものは、一として、朕が所有たらざるはなし。汝、今、朕が物を費し、朕に勝れる生活を爲す。思ふに、汝は朕が位を奪はんと欲す

るなるべし。僧正惶懼して、否、臣何ぞ異志を抱き申すべき」と述ぶる言葉もくごもりたり。王聞きも果てず、だまれ、僧正。汝の罪は明白なり。命惜しくば、朕が三つの間に答へよ。答若し誤らば、身首處を異にし、所有の物は一切沒收せらるべし」と宣ふ。僧正、奉答し得べしや否やは測られぬど、願はくは、試みさせ給へ」と申す。然らば、問はん。一日以内^(一)に答ふべし。朕が壽命は何時盡くるか。これ一つ。朕馬に騎りて一日のうちに世界を一周せんと欲す。何程の速度にて走らば可なるか。これ二つ。

朕は何を思へるか。これ三つ。僧正驚き惑ひて、聖旨深遠なれば、一日以内には對へ奉り難し。かしこけれども、大王仁愛天の如く、寛大海の如し。願はくは、二週間の猶豫を賜へ」と哀願しければ、王これを許しぬ。

僧正御前を退き、憂慮措くこと能はず。馬をオクス^(二)フォード大學に馳せて、學者の智慧を借らんとせしが、皆首を振りて曰く、われらの講ずる書には、王の問に對ふべき答なし」と。去つてケンブリッジ大學に至りけれども、亦同じ。僧正失望いはん方なく、死を

(一) ロンドンの西凡
 六十三哩
 三河の左岸
 あり

(二) ロンドンの東北
 五十八哩にあ
 り

期してすごくと馬首を回らしけり。

二三 頓智救命 その二

枯木の梢に鳴く鳥、草むらにすだく蟲、見るもの聞くものにあはれを催して、たそがれのかねの音幽かに響く時、僧正はわが家に近づきたり。と見れば、此方に来るはわが牧場を管理する牧人なり。僧正を見て、臺下、今歸り給へりや。王宮には如何なるよき事か候ひつる。といふ。僧正は「悲惨々々」と叫びて、ありし次第を物語りぬ。

牧人はいと憐がりて聞き居たりしが、やゝありて、愚者も賢者に智慧をかす。といひも果てぬに、僧正思はず聲高く、汝に如何なる智慧かある。とく語れ。と宣ふ。さればなり。人みな某の風采を臺下に肖たりといふ。臺下、しばらく某が臺下の服装を擬するを許し給へ。某直ちに都に上り、王に謁を乞ひ、奉答を試むべし。事若し成らずば某が命を失はんこと固より悔ゆる所にあらず。と、誠心面に溢れたり。僧正大いに喜びて、事を託しつ。こゝに於て、牧人は法衣を纏ひ、僧冠を戴き、錫杖をつきて立ちければ、あつば

れまことの僧正とこそは見えたりけれ。

この僧正、やがて、倫敦に行きて、王に謁見す。王嚴かに宣ふやう、いかに、僧正。然らば、第一問に答へよ。」
僧正かしこまりて、陛下よ。畏くも、陛下は崩御の日まで御命を保ち給ひ、それより後は一日もなからへ給ふべからず。最後の御息を引取らるゝ時に崩御ありて、それより一分たりともこの世におはしませすことなし。」と申したり。王は笑ひて、汝は巧にも申すものかな。然らば、この問はそれにて可なりとせん。第二問は如何に。」僧正徐ろに申すやう、陛下。

日出に起きいでたまひて、太陽が明朝東天に昇る時まで太陽と同行せさせ給へ。二十四時間にして世界を一周し給ふべし。」王大笑して、實に然り。汝は賢きものなり。これも可なり。然らば、次はいかに。」
「こはいとやすき御問なり。陛下は臣をカンタベリ」の僧正とおぼしたまふなり。」と對へて、さて、申すやう、臣は只賤しき牧羊者なり。願はくは、寛大なる大御心をもつて僧正並に微臣の罪をゆるし給へ。」といひつゝ、法衣を脱ぎすつれば、全く似而非僧正なりければ、王は驚きあきれて、言葉なし。やゝありて、汝は

面白き男なり。とのたまひて、この牧人に褒美の金を取らしめ、僧正をも免しければ、牧人は喜び勇みてカ
ンタベリーにぞ歸りける。

一三 自由の神

外に出ると寒いし、内に居ると窓が低くて、只海面が見えるばかり。せうことなしに讀みふるしの新聞を眺めて居ると、かたと船がつく。自由の神の像がぬつと眼の前に峙つといふよりも、臺石が絶壁の如く面に當る。餘程離れてそりかへらぬと神の

顔は見えない。今更高的のに驚く、

カーキ色の番兵が寒さうに突立つて居る前を通り



自由の山の神の像

ぬけて、牢獄のやうな臺石の内側へ入る。小さな厚い窓から黄色な光線が斜に黒ずんだ石の

壁を照す。自分の足音にもぞつとするやうな處を奥に進むと、其處に昇降器がある。見物人が五六人乗ると、すうと上る。たしか五階まであつたと思ふ。

つまりこれだけが臺で、其處からは階級を上らねばならぬ。見上げると一直線に直徑二呎位の柱がずつと通つて、それに鐵の廻り梯子が、上りと下りと、二條の大蛇がからみついたやうになつて居る。其の梯子には十段目毎位に電燈がついて居て、下から見上げると一種の偉觀である。此の梯子はたしか百六十何段かあつたと思ふ。漸く上り盡した處に窓がある。銅像の冠の下のぎざ／＼した處に當るので、下から見ると、冠の針の様な後光が、柱の如く天に沖して見える。今更大きいのに驚く。

此の像を造つたアウガスト、バーソルヂと云ふ佛國の彫刻家は餘程變つた人と見えて、始めて紐育へ着いた時、甲板の上から港を眺めてこんな事を考へた、便船毎にこんな澤山の移民が、此の自由の新天地に新運命を開拓せんとしてやつて來る。然るに此處に彼等新國民を接待する何等の設備もないのは遺憾である。もし此處に一つ何か一大像でも建て、一つには自由の新天地たる象徴とし、一つには新渡來者歡迎の意を表す事にしたならば、長い間海上に搖られてやつと此處に着いた彼等に言ふべから

ざる慰安と激勵とを與へるに違ひない」と。是が即ち此の像を作るに至つた動機で、バールソルヂはそれからすぐ佛國に歸り、一般の同情に訴へて二十萬弗の金を募り、やがて佛國民の名を以てこの銅像を建てるに至つたのである。

敷地についても随分苦心したが、つひに此のベッドロー島を選び、愈千八百七十九年に工を起した。固より像だけの高さが百五十呎もあるのだから、逆も鑄るわけには行かぬ。已むなく木の模型を拵へてそれを三百に細かく割り、其の割つた模型の上に銅

板をあて、全部打抜き細工で作り上げた。尤も像を建てる一般の土木的設計は、巴里のエッフェル塔を建てた有名な技師エッフェルの設計ださうな。像は自分の母を象どつたといふ事であるが、兎も角技藝家として、獨力で是だけのものを建てるといふは恐らく類があるまい。此の像を仰ぎ見るものは、誰でもバールソルヂの偉大なる精力を思はずにはゐられないであらう。(紐育に據る)

一四 泉岳寺

大町 桂 月

*名は芳衛。著述家。

吉良上野介義

上野介の首は獲たり。四十七士の志は遂げたり。吉良邸の裏門にて銅鑼を鳴らして人員を點するに、一人も缺くるものなし。上野介の首を擁し、隊伍を整へて、回向院に至り、休息せんとせしに、住持拒んで入れず。直ちに泉岳寺として繰出す。飽くまでも落着きたる態度なり。

大石良雄。

かばかり落ちつきてもなほ一つ手ぬかりありき。吉良邸の燈火を消すことを忘れたることなり。火事起りては大事なりとて、内藏助これを大高源吾富森助右衛門の兩人に命ず。これには餘程の膽勇を

良雄の長子。

要す。而して、これは大石主税の發言にかゝれりと

も傳へらる。

かくて、火事の起る心配は無し。

追兵の心配はあれども、悠々と

して迫らざるは、さすがに義烈

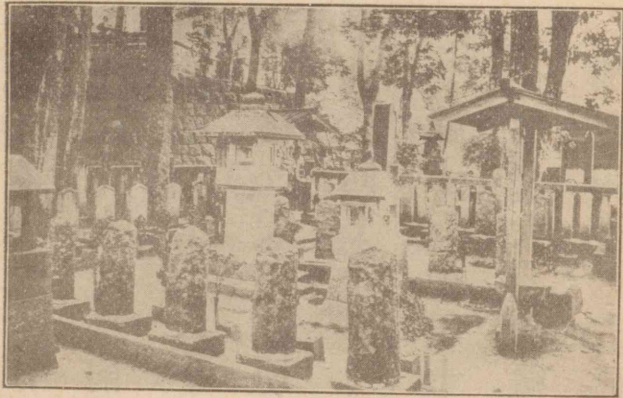
無雙の四十七士なり。

されど、追兵は來らず。伊達屋

敷の前を過ぐ。吏遮りて狀を

問ふ。答ふるに實を以てす。

吏留めず。無事に泉岳寺に至り、上野介の首を井の



泉岳寺義士の墓

芝原芝口にあり

*播州赤穂城主淺野長矩。

水に洗ひ、三方に載せて内匠頭の墓前に供へし時の
心中や如何なりけん。その井は首洗井と稱して、今
もなほ義士の墓前にあり。いと淺き井なり。
内匠頭の墓前に一同香を供へ、各自ら名乗りて拜謁
す。終りて、内藏助進んで短刀を墓上に置き、その刃
を外に向く。かくて、祭文を讀上ぐ。

「元祿十五年午十二月十五日、唯今面々名乗り申
す通り、大石内藏助始め、御足輕寺坂吉右衛門迄
都合四十七人、死を盟ひし臣等謹んで亡君の尊
靈に告げ奉り候。去年三月十四日、尊君上野介

殿を御刃傷遊ばされし御事、私どもその仔細存
じ奉らず。然る所、尊君御生害、上野介殿御存命
御公裁の上、私どもかくの如きの企、尊君の御心
にあらず、却て御怒恐入り奉り候へども、私ども
尊君の祿を食み、俱に天を戴かざるの義もだし難
く、共に地を踏まざるの分捨て難し。而して、晝
夜艱難仕候。恥を抱き相果て候ひては、泉下に
於て申上ぐべき詞これなく候。よつて、御意趣
を繼ぎ奉るべくと存候より、今日を相待つこと
一日三秋の思に御座候。四十七人の者ども雨

に臥し雪にたゞずみ、一日二日に漸く一食仕候。老衰の者、病身の輩は屢死をすゝめ候へども、蟻螂の斧を頼むの笑を相招き、愈以て尊君の御恥辱を相殘し申すべきかと存じ奉り候へども、止むことを得ず、昨夜申合せ、上野介殿御宅へ推參仕り、即ち上野介殿御供申し、これまで參上仕候。この脇差は尊君先年御祕藏我等へ下し置かれ候。只今返獻仕候。御墓の下、御尊靈これあるに於ては、再び御手を下されて御鬱憤をはらし給へ。右の趣四十七人一同申上候。

義士一同みな涙を流す。一篇の結末ことに哀痛なり。千載の下、なほ讀者をして泣かしむ。 (四十七士)

一五 北地の冬

五十嵐 力

稻刈が済んで、背戸の熟柿が紅に染まるころになる
と、そろ／＼霜柱が立つ。そして、道を歩くと、下駄に
土がくつ附いて重くなる。西の月山湯殿山が白く
なる。肌を裂く様な寒い木枯が吹荒む。かくして、
我が郷に冬が來るのである。

十二月になれば、全く雪に閉込められてしまつて、家

國文學者。早稲田大學教授。

共に羽前國に在り。

家では、陰鬱な冬籠りの生活に入る。四方山の話や人の噂が炬燵を圍んだ人々の口に上る。吹雪の時などは、少しの戸の隙からでも細かい砂の様な雪が吹込むので、雨戸をしめきつて、一日、薄暗い生活をす。それでも、晴れた日には南の縁に婆さんの針仕事も見受けられる。子供等は小さな赤い手をして棒の様な氷柱を持ったり、雪達磨を作ったりして遊んで居る。雪解の雨垂がぼたんくと静かな冬の日にさえ渡つて聞える。

一月の末になると、大寒で、五六尺も積つた雪が踏ん

でももぐらぬ位に堅くなる。やがて、壯快な兎狩が

始る。子供の氷滑も盛になる。

小山に登つてみると、山となく、野

となく、見渡すかぎり只眞白な中

に、長く紺青の一筋道を畫いて、最

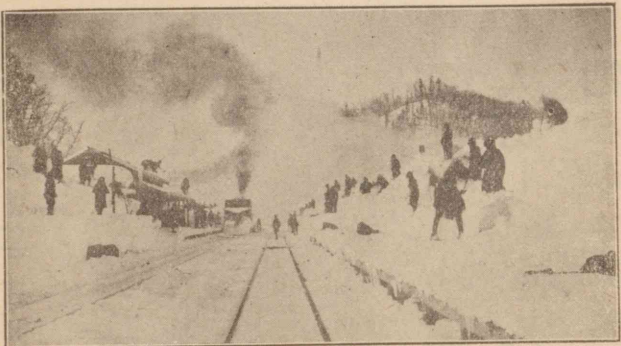
上川がうねつて居る。

三月の末になれば、雪が段々融け

て来る。最上川の水量が増して、

我が郷は漸く暖い、楽しい春に逢

ふ。梅も櫻も桃も李も皆一時に咲揃ふのである。



雪中の停車場

まるで冬の世界とは違つて居る様な心持がする。
自然から雪と云ふ大壓迫を受けて居た人々が、冬の
陰鬱な生活を送り出して、花咲く春に逢つた時の愉
快は、實に言葉に盡されぬ。(實習新作文)

*國文學者、歌人。
宮内省御歌所寄
年人。明治四十三
歿す。

一六 歳暮感懷

中 邨 かう 秋 香

霰たばしり、風あれて、
人足しげき八街に、
門松ひさぐ聲すなり。
今年もやがて暮れぬとや、

暮れぬとや。

花に宿れる春の鳥
千草に眠る秋の蝶
結びもとめぬ夢のまに、
はや一年は過ぎにけり、

過ぎにけり。

書讀む夜はの窓の雪、
暗は照さで徒らに
頭にのみやつもるべき。
たゆまず學べ、時のまも、

時のまも。(新體詩歌集)

一七 一年ノ計

一年ノ計ハ春ニアリ。
 落花ハ枝ニ上リ難シ。
 百聞ハ一見ニ如カズ。
 入ルヲ量リテ出ヅルヲナス。
 渴シテモ盜泉ノ水ヲ飲マズ。
 能ハザルニアラズ、セザルナリ。
 百里ヲ行クモノハ九十ヲ半バトス。

過チテハ改ムルニ憚ルコト勿レ。

瓜田ニ履ヲ納レズ、李下ニ冠ヲ整サズ。

一八 田舎の祖母に

樋口一葉

今朝は風はげしくて、北向の部屋は窓すら明け
 難きやうに御座候。山おろし烈しき御地はい
 かばかりかと、父母ともく御案じ申上げ、御噂
 致し居り候。

御祖母様には、この寒さに御障もあらせられず
 候や。歳暮に伯父様より御文たまはり候ひし

*名は夏子。
 女流小説家。
 明治二十九年歿す。

節、相變らず御健かにて伯母様も御及びなきほど御内の御用何くれと遊ばさるゝ由承り、父母はじめ私ども、嬉しう存じ上げ、花の頃にも相成候はゞ、兄こと御地へお迎に參り、御誘ひ申して、上野・向島の人出御目にかくることゝ致したく、一同待居り候。なほ、一月ほどの間は寒さ加はり申すべしとか。何とぞ御身御大切に、御風召したまはぬやう遊ばされたく、たゞこれのみ願ひ居り候。

つたなき出來には候へど、私仕立て候綿入、小包

郵便にて御送り申候間、御召の下にお重ね下されたく候。母よりは例の羊羹差上げ候。いづれも二三日うちには着き申すべく候。當地にては、誰もくかはることなく候。父は昨年おしつまりて昇進致し候。御喜び下されたく候。これは、御年始状差出し候ひし節、申上ぐべかりしを、つい洩したれば、其の方よりとの申しつけに御座候。どなたさまにも宜しく申上げ下されたく候。かしこ。
(通俗書簡文)

一九 孝女いち その一

資性孝順、よく盲父狂母に事へ、又、善く病める夫をいたはり、貧しき一家をかよわき身の雙肩に擔ひ、明治四十年賞勳局より綠綬褒章を授けられたる一婦人あり。山崎いちといひ、武藏國入間郡川越町の人なり。

いちの父は新太郎といひ、家屋敷の外に田畑も所持し、酒屋を營みて、相應に暮しけり。安政三年、新太郎二十八歳の時、不幸にして眼病を患ひて、盲となりて、職業もとられずなりぬ。かゝる中に、いちまつの二

女をまうけしが、妻たいは育兒の傍、女の細腕に辛くも營業を續け、り。これより、家計漸く傾き、心を痛むること多かりしが、明治六年に至りて、末子ちかを



山崎 いち

生みし時、たいは産後の日立悪しくて、心狂はしくなり、且、乳さへも出でざるに至りぬ。嬰兒は呱呱として飢を訴ふ

れども、母は爲すべきすべをも知らず。此の時、長女いち、纔かに十二歳の少女なりき。世の常の娘なりせば、たゞ悲哀に沈むのみなるべきを、いち、は悲の

中にも心に決する所ありて、嬰兒を抱きて乳ある家をたづねて、乳を貰ひてはぐくめり。さるを、心狂ひたる母は、これを喜ばず、却て叱り罵るに、いちはこのに少しもさからはず、摺粉を造りてちかに與へ、折を見ては貰乳して保育する、その辛勞一方ならず。さる程に、乳不足にて育ちし身のか弱くて、ちかは十二歳の時、暑氣に冒されてみまかりぬ。母痛く之を悲しみ、朝夕線香をたき、位牌を擁して哀の涙に暮れけるが、時々家は家を飛出して、ちかの墓前に至り、念佛稱名して夜を明すこともありき。されど、いち逆

うては爲悪しと思ひて、すべて其の爲すがまゝに任せ、母の家にありて線香をたくときは火の元に注意し、墓に參る時は、隠れて後よりつけ行きて、木蔭より見護りたり。かくの如きこと七年の長きに及びしが、いちには聊かも倦める色なし。其の焦心勤勞いかにばかりなりけん。思ひやるだにあはれなり。かゝる殊勝なる振舞に、いちには川越の孝女として其名を近郷に知られたりしが、世話する人ありて、明治二十四年の一月、齡二十九歳の時、同郡南古谷村の古田寅吉といふを迎へて夫としたり。かゝる不幸な

る家をもいとほで來りし程のものとして、寅吉も亦温良にして、よくいちの心を酌み、力を戮せて狂母と盲父とに事へたり。いちの喜譬ふるに物なく、貧しき中にも、暖き春光に浴する心地せり。

然るに、二十九年に至りて、頼み切つたる夫も亦病に打臥す身となれり。いちは寢食を忘れて、父と夫との看病に手を盡し、粉骨碎身奉養至らざるところなかりき。さるに、父は三十二年に歿し、夫も亦三十四年に同じ旅に出立ちぬ。いちの嘆いかばかりなりけん。幼き時より家庭の苦勞を一身に引受けたる

身の、始めて良き夫を持ちて、苦樂を語り合ふ嬉しき日もつかの間にて、またも闇黒の巷に入れり。

足らぬ家政を身一つに引受くるだにあるに、狂母を抱へて其の満足を得しめんとす。尋常の女なりせば、己れ亦共に氣も狂ふべきを、いちは心を勵し力を盡して、能く一家を支へ、孝養を缺きたることなかりしぞけなげなる。

三〇 孝女いち その二

不幸に不幸を重ねて、家計益傾き、父の歿りし後は、所

有の田畑も人手に渡り、酒屋の營業も續くこと能はず。いちには僅かに小作をなし賃仕事などして、家計を支へけり。心狂ひたる母はいちの苦心をも思はず、或は菓子をねだり、或は食物の好惡をなして、むづかる事恰も頑兒の如く、動もすれば、親を乾し殺さんとするか。など怒り罵ること屢なり。殊に、母は酒好きにて、一度に一升の酒を傾け盡すほどなれば、日三度の食膳には必ず酒を供へざるべからず。また、大の煙草好きなるに、半身不隨にて手足の自由ならざるが故に、いちを傍に侍せしめて、煙草をつめ火

を吸付けしむることつねなり。これも日に幾度ともなきことなれば、其の繁忙いふばかりなきに、剩へ或時は其の遲きを怒り、或時はそのつめ方のあしきを罵る。先に父と夫との看病をなしたりし際にも、彼方に手間取ることあれば、此方は怒りて、我を顧みざるか。と口ぎたなく罵りつ。されば、母の眼に觸れぬやう心を配りて、かの二人をいたはりたりし其の苦心、察するに餘りありき。

或人このさまを見て、あはれがりて、いちに向ひて、母上がくさくさの求をせらるとも、元來常ならぬ心の上

ことなれば、御身は萬づ其のまゝにせられずともありなん。或時には寧ろ叱りて戒めらるべし。母御を叱りたればとて、誰も御身を悪しく思ふ者はあらず。といひけるに、いちほ色をかへて、答へて曰く、心狂ひたればとて、わらはの爲には大事の母なり。たとひ無理を申されんとも、子として母を叱らんはわらはの忍びざる所なり。わらは、不運打續き、父には別れ夫には死なれ、今は何の樂もなし。唯母に事ふるをせめてもの樂どす。若し母の事を見ることなからんには、此の世に永らへんかひなからん。如何

にもして母に不足なからしめんと、心ばかりはあせれども、見らるゝ如き貧しき身の、思ひ半ばにも満たぬ口惜しさよ。といひさして、よゝと泣きければ、その人いたく恥ぢて、その餘を語らざりき。

かくて、よく深切に母を看護し、その機嫌を損ぜず、田畑に行かんとすれば、必ず先づ母の許を乞ひ、歸れば、好める物をすゝめ、足腰をなで、ついで、また母の承諾を得て業に走り、夜は枕邊に侍りて、勞り慰め、母の熟睡して後に夜業を始め、深更に至りて止む。かくて、母時々目をさまして、或は厠に往かんといひ、或は煙

草の火を求むれば、いちはおひくしく起ちて、その事に従ふ。凡そ此の如きこと多年、一日の如し。人その至孝に感じ、ひそかに同情の涙に袂を絞るものおほし。

妹まつはさきに同郡山田村なる松平茂平といふものに嫁ぎたるが、茂平は商賣の手違ひより精神に異状を來し、遂に家出して、そのまゝ行方知れずなりぬ。折しも、まつは妊娠せる際なりしが、いちお妹の不幸を捨置くに忍びず、「一飯の食を分ちても、困苦を共にせん」とて、まつを我が家に引取りて、まめくしく世

話したり。やがて、その産落し、女兒にわかと名をつけて、籍をば夫の家に入れしめしが、兩人の身の上を不便がりて、そのまゝ我が家に留めて、養へり。こはいちに取りては所謂「重荷に小附」なれど、いちお少しも苦とせず、友愛の情はいよく切なり。

いちおこれぞといふほどの教育を受けたる身にもあらぬに、かく萬づに道をつくして而も多年渝らざるは、洵に聖賢の教に稱ふものといふべきなり。宜なるかな、事雲の上に聞えて、緑綬褒章を賜はりぬ。女にまれ男にまれ、貧しきも富めるもまして、物學び

したらんものは、かゝる善行に鑑みて、自ら顧みる所
なかるべけんや。(善行大鑑に據る)

義太夫節の三味
線。壺阪の明治
曲をなす。七十三
七十二年没す。

三 名人團平

「御免なさりませ、團平御師匠さんは此方で。」と海松布
のやうな着物を着た乞食が、初代豊澤團平が住居の
格子先へ立つた。

「誰ぞ來なはつたやうぢや。ちやつと出て見や。」と、女
房は煙管を下に置きながら、長火鉢の前から聲を掛
けて、臺所に立働いて居る女中を呼んだ。「へい〜」。

と、濡れた手を前垂で拭きながら、玄關に出た女中は
右の手で襷を外しながら敷居際に手をついて、障子
をあけて、來訪の客を見上げた。

「ちよつと、その何で御座ります、お師匠様にお目通り
を。へい、へい。」と、物乞は、揉手をしながら腰を屈めた。
「あらつ。お前、お貰やないか。お家はん、お貰の癖に
旦那はん……まあどうだつしやる。」女中は頓狂に
叫んだ。

「何や、騒々しい。どうしたと云ふのや。」と、女中の仰山
な聲に釣られて、女房も出て見た。

「此の様な服装を致しまして、誠にはや何で御座りますが、どうぞ一生の願いで御座りまするで……へい、お師匠様にちよつと。」もうそない事出来へんやさかいな。それに何用か知らんが、お師匠様もお留守やよつて、さつさと往んでおくなはれ。」と女房は面を顰めた。「そこをどうか一生の願いで御座りまするで」と、乞食はしつこくして、動きさうにもない。

「何ぢや、騒々しい。」と、主人の團平は襖から體を半分出して玄關を見た。「あんたはん、まあどうだつしやる。お師匠様に逢ひたいいうてな。ほんまに厭なお貴

や。」と、女房の聲には角があつた。「なに、お客様か。」と、團平はやをら玄關口へ出ようとした。「よしなはれ、お貴だつせ。」と女房は良人の袖を控へた。

「何、ちよつとお目にかゝりさへすれば、もうはや此の世に望も御座りませんで。へい。」と、格子先の聲には濡みがあつた。「一生の御願。ほう。」と、團平はたまらず障子際に出てしまつた。

「へい、一生の願で御座りまする。」團平はつと進んで、その海松布の様な着物の珍客を見た。さうして、慌てたやうに、「これはよろこそその御尊來。さあ、

どうぞ。」と自身で格子をあけて、「こらつ、何を愚圖々々してゐやる。お洗足なと持て來んか。」と女共を叱つた。そして、今更のやうに恐縮がる乞食を通して、無理に上座に据ゑた。女共は唯呆れて物もいへなかつた。

「むさいなりで誠にどうも相濟みませぬ譯で、へい。」と、乞食は座にえ堪へぬらしくもぢく／＼してゐる。「いや、どう致しまして。して、御用は……。」と、團平は賓客の禮を崩さなかつた。

「實は、その、突然の儀に御座りまするが、私は至つて義

太夫の三味線を伺ふのが好きで御座りまして。しかし、まだその何でござりまする、お師匠様のを伺つたことがござりませぬ。でそれをば一生の願とはして居りまして、御覽のやうな、はや見る影もない態で、何ともどうも……。」と、きれ／＼の言葉に境遇を恥ぢるそぶりは現れて居るが、其の熱心の態度は眼の輝きにも知られて、さすが古今の名人の心を動かすに十分であつた。

「さよか。それは、まあよろこそ。よろしい、弾きませう。どうぞ遠慮せんと、聽いておくなはれ。こら、お

茶とお菓子。それから、お煙草盆はどうした。いや、
どうも失禮な奴ばかりで。」と、名人團平は次の間に立
つて、三味線を抱へて來た。「誠にはや有難いことで
ござりまして。」と、乞食はたゞ感謝のみである。

調律の撥音にさへ、浪花の街のどよめきは静まつて、
秋の午下りは夜半のやうだ。弾きだしたは志度寺
のお辻の最期。その水際立つた絃の音には、富貴も
なく、貧賤もなく、人もなく、我もなく、三味線もなく、撥
もなく、唯すみわたる妙絶奇絶の音ばかり。乞食の
頬には涙が滂沱と傳はつた。乞食は欣然として辭

*花の上野響の石
碑といふ淨瑠
璃。

し去つて、何處とも知らず往つてしまつた。

それを飽かずく見送つた團平の眼には濡みがあ
つた。その名人の眼の濡みこそ、知己に遇つた歡喜
と二度と會はれぬ別離の悲みとを語るものであつ
た。やがて、室に歸つた團平は、藝人の妻としての女
房の不心得を責めて、離縁を申渡したが、同輩門弟等
の詫で漸く納まつたといふことである。其の名人
今は天に歸つて、不思議の音締はもう耳にすること
が出来ぬ。

あゝこの音楽の天才は、時の流と共に過ぎ去つてし

まつた。併し、この美はしい譚は永久に生命をもつて亡びることはないであらう。(耳の趣味に據る)

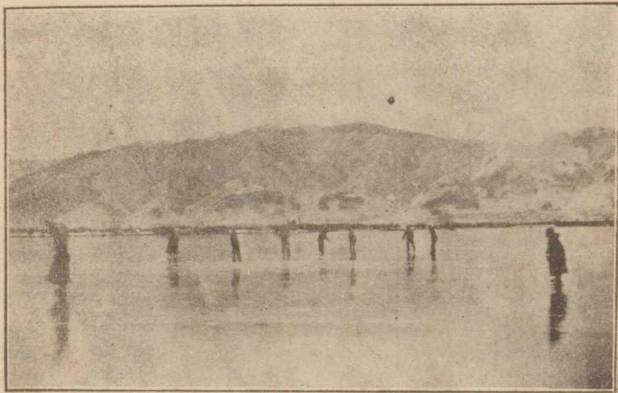
名は喬松。文學者。早稻田大學教授。

三三 氷の諏訪湖

吉江孤雁

冬景色の諏訪湖は如何にも莊嚴なものだ。四山が盡く雪。簇々として聳えて居る八ヶ嶽は純白の姿をして、その雪が何時消えるとも思はれない。湖水を繞る枯田・細徑、古城址へ通ふ樺並樹の道、上下諏訪の市街、香阪・觀音の絶壁、盡く雪に覆はれて、四方の山からおろして來る風が、縦横に湖面の滑かな氷上を

吹きわたる。



諏訪湖スケッチ

月夜に於ける氷上の景色は凄
い位である。山と云ふ山は銀
色に鍍金されて、市街の燈火も、
村々の火影も、凍り着いたやう
に見えて居る。風も夜間は多
く起らない。静寂の極み。こ
の様を地に人が住んで居るの
かと疑はれる位である。以前
は「氷引き」と云つて、夜間、厚さ三四尺もある氷を四角

に切抜いて、その穴の上で篝火を焚いて、その火の下へ寄つて来る無数の鮒を網ですくひとつて居た。その火が點々として氷上に散在して見えるのは、一種の奇觀であつた。が、今は「氷引き」が禁ぜられたので、その火影を見ることは出来なくなつた。二月が過ぎ、三月の下旬になると、四山の積雪が次第に溶けて湖水に流れ込む。白ちやけて見えて居た森林の頂が薄紫に染つて来る。枯田の上に雞の聲が長閑に聞えだす。その頃湖水の面に一大變動が起つて来る。

稍生ぬるいやうな風が二三日、山から山へ吹繞つて、湖水の面に打當つたかと思ふと、夜一夜、恐しい響が氷の中から聞えて来る。下諏訪の客舎に始めて泊つた旅人などはこの響に、思はず戶外へ飛出すといふ事である。

響が一日々々と強く鋭くなつて来るかと思ふと、風が一時に稍強く吹く。一大叫喚、慣れて居るものでも思はず飛上る位。夜が明けてから見ると、南北に互つて一道の水流、厚い氷は縦横の龜裂を生じてこれが次第々々に分離しだすと、壓へられて居た水は

一時に洶々として涌きあがる。風は又連日吹渡る。打當り、打水り、氷塊をば盡く何處へか流し盡さなければ已まない。波は愈奔騰し、一樣に白い頭を上げて四方に狂ひまはる。

水の色を藍青に染めて、四山の若緑が影をひたす頃、山櫻の花が盛にちりこぼれる。汀の蘆は青くのびて、一片の白雲が悠々とその上を掠めて過ぎる。(高原)

三三 深海

飯島 魁

深海とは何ぞ。予はこの間に對して極めて簡單に

東京帝國大學
教授、理學博士、
動物學者。大正
十年歿す。

「それは常暗常冬常靜の處だ」と答へようと思ふ。ちよつと陸上で考へると、深海の底も、陸地の如くに、山あり、谷あり、野あり、岩石磊々としてゐる様に思はれるけれども、實は、さうでなくて、何等の景色もなく、一樣な平地式のものである。

何故に、深海は常暗なるか。いふまでもなく、光線が達せぬからである。太陽の熱は百五十尋以下に達しないが、光線は遙かに下まで行渡る。併し、三百尋乃至五百尋になると、日光も極めて少量で、九百尋も行けば、絶對になくなる。二三百尋も行けば、其處に

は全く植物がなく、棲息してゐるものは動物ばかりである。然らば、かゝる深海の底には全く光がないかといふと、さうとは限らない。日光は達せぬけれども、発光性の動物がゐて光を放つ。學者の想像によれば、夏の闇夜に汽船で大洋を航海すると、船の舳艫又は舷側の方面に、小なるは線香花火の如く、大なるは金盞の如き光のちら／＼と閃くのを見るやうに、発光性の動物の作用によつて、深い／＼海底にも燐光がある。その有様は、丁度、暗夜、飛行機に搭じて東京市の上を飛駛つて、電燈、瓦斯燈、石油燈の閃々たる

るを見るが如きものであらう。

深海の底は常冬である。光よりなほとほりの悪い熱は深海の底に這入らない。熱帯地方に於て太陽は絶えず海水を暖めてゐるが、暖められた水は常に表面にある。その水は貿易風に煽られて海流を起し、赤道を中心として、南と北とへ流れ、兩極に近づけば、冷たくなつて、下へ沈み、表面とは反對に、北のものは南へ、南のものは北へ流れる。併し、海の底では、流の道筋はきまつてゐない。深い處は、僅かな流があるばかりである。

かやうな處では、溫度は常に氷點乃至氷點以下である。無論、溫度は深さによつて違ふが、懸離れた差異はない。即ち、氷點以上にずつと上ることもなければ、また低く下る様なこともない。これには多少地熱の關係があるであらう。

最後に、深海の底は常靜である。前にもいつたとほり、太平洋に於ける日本海流、大西洋に於ける灣流の如き海流はあるが、二百尋も三百尋も下に下れば、何等の影響もない。表面では、暴風が吹荒んで、狂瀾怒濤が山の如くであつても、海底は極めて靜かである。

深海の底は無風・無音である。絶對的に靜寂である。其處には、耳を劈くやうな自轉車もなければ、電車もない。無論、バクテリアはない。バクテリアがなければ、腐敗もなく、従つて、臭氣もない。併しながら、生物はある。生物があれば死ぬものゝあるは明かであるが、死んでも腐らず、其處にゐる動物がみなそれを喰べて了ふ。かくの如き靜寂の境にもやはり生存競争は行はれて、陸上で、鴉や雀の自然に死んでゐる死骸を見ることの出来ぬやうに、深海の底の動物の死骸も、みな他の動物に喰はれて了ふ。

海底は熱も光も音も無い、宛然たる死の國である。

二四 ペンギン鳥

杉村廣太郎

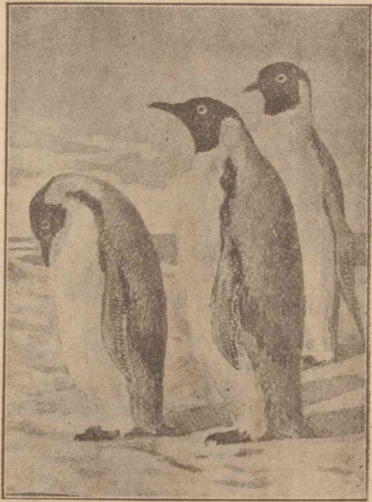
*東京朝日新聞記者。楚人冠と號す。

南極の一夜は遠山の雪から明ける。さても、其の明けかゝる様の、奇しくも美しく見ゆるかな。地球の南の果ての果てとあつて、日が出ても低い處を周るばかり。これが夏の間は殆ど地平線下に没することがなく、七十幾日かは晝間ばかりで打續くが、さて冬となると、其の反對に、日は沒したきり、夜は七旬の永きに亙る。

其の夜ばかり續く冬の一夜の心細さ、到底人間界とは思はれない。太陽は五月中頃から全く消えてしまふ。初は、正午に、北の方で少し明るくなるが、やがてそれも消えて、常闇の夜となる。冬の最中には、華氏の氷點下五十度などいふのが珍しくない。大烈風が颯々と鳴つて、雪を捲いて打付けて來る。偶、空の晴れた時、外面に見えるのは、微かな星の影と氷の破れ目に動く潮の光とのみである。耳にするものは氷の裂ける音。ぽん／＼とさながら銃聲のやう。稀に、氷の破れた間で、鯨がぶちや／＼と寝返りを打

ち、又は、海豹が氷の中から飛出すとか、さては、冬來ぬ前に立ち後れた極地の鳥が悲しげに叫ぶ聲がする。この永い一夜が七月中頃になると、一寸日の顔を見るやうになる。巔の雪が其の光を受けてぼろと紅に見える。この紅に光る遠山の雪の外、大天大地はまだ暗黒の鬼窟裏で、殆ど咫尺を辨ぜぬ鳥羽玉の闇である。これが幾日か経つて、次第に光が麓に落ち、氷雪の上に落ち、寥廓たる乾坤がこゝに全く明けて、一面皚々たる南極圏の朝ぼらけ、目も遙かに續く萬頃の氷雪、遠近に聳ゆる大小さまざまの氷山が、日光

を受けて種々な色に照榮える。愈、南極の夜が明けて、春が來た。



ベ
ン
ギ
ン
鳥
春來らんとする南極の曉を待ちわびて、何處よりともなく、北の方、海を泳ぎ渡つてこの南極圏に押寄する一群の怪鳥がある。氷

上に泳ぎ着くと、宛ら隊伍を組んだやうに打連れ立つて、歩いて行く。これがペンギン鳥である。背には黒、腹には白の綿毛が一杯に生えて、兩脚で立

つて歩くさまは、小作りな人間が黒の燕尾服に白のチヨッキ、白のズボンで、兩手を振つて歩くやう。而も、互に出會ふ時はお辭儀をするやうな體で、首を下げ、ペンギン鳥の植民地ともいふべき處には、何十萬といふ大變な數のペンギンが一緒に集つて巢をくふが、何等かの社會的制裁が行はれてゐると見えて、餘り甚だしい喧嘩はない。中には、近處に親を失つた子鳥が心細く巢に残されてゐるのを見て、自分の手に引きとつて養育一切の世話をするなどといふ、義俠心に富んだものもある。

ペンギンは可愛い恰好の鳥である上、其の容貌動作が如何にも滑稽じみてゐるので、極地探検家の無聊を慰めること一通りでない。人を人とも恐れず、丸で友達のやうに、人の側へ寄つて來て、何やら話しかける。蓄音機でもやれば、大勢がこれを聽きに來る。さうして、互に顔を見合せて、如何にも感に堪へぬやうな顔をし合ふ。氷雪の外に見るものゝない處とて、よくく無聊に苦しむものと見え、何か變つた事があれば、ペンギンは随分遠方から見に來る。大勢で來る時は、必ず指揮官が指揮してゐる。如何にも

奇妙な鳥である。(へちまのかは)

(二) 水戸家九代の藩主。萬延元年歿す。烈公と諡す。

(三) 齊昭の生母。

(三) 名は昭訓、齊昭の第十四男。
(四) 砲術の練習所、水戸にありき。

二五 公子の躰方

徳川齊昭

餘寒のところ、その地子供等、緑の間にも、障なきは、一段の事に候。

去る二十七日、餘四磨事、神勢館へ行き候由、是よりは、歩行又は乗馬にて、度々行き候が宜しく候。朝も未明より起き、水にて顔を洗ひ、薄着にて庭などに出て、子供相應いたづら致し候が宜しく候。風を引き申すべしなど申して、用心致させ

候は、以ての外に候。とかく武士の子は手強く

手荒に成長致し申さず候うては、追々成長の上、



徳川齊昭

公家や町人出家の様に成行き、天下の御爲を致し候様に相成らざるゆゑ、何分にも、手強く體を鍛へ候様に致したく候。

さて、文武共に、出精致させ候が宜しく候。文武を勵まし、それにて死に候程の子は惜しからず候へば、死に候うても苦しからず候。他家へ養

侍女この名。

水戸市儒樂園内こにあり。

子に遣はし候うても、柔弱じやうじやくにて、文武これなき者にては、當水戸家の外聞宜しからず、死に候は誰にても一度は死に候者故、外聞宜しからざる子供が成長致し候位に候はゞ、死に候方遙かに勝り候ゆゑ、表の附の者並に伊勢等へも申聞け候うて、手荒く仕立て、文武を勵まし申すべく候。奥にても、附の者に申聞け候うて、讀書のさらへ等をよくく致させ申すべく候。晝は文武稽古の間は、前文に申す如く、神勢館又は好文亭等へ歩行致し候が宜し。又、相手などと竹刀打致

し候が宜し。子供の大人の如く致し居り候は、身のこなれ悪しく、宜しからず候。

如才かさいはこれあるまじく候へども、序にまかせ申遣はし候。牛乳は、人乳をやめ候ほどの子供は、誰が用ひ候うても宜し。毎朝取立ての乳を飲ませ申すべく候。一人にて五勺か一合も飲み候はゞ、足り申すべく候。一橋よりも、今以て日取りに來り、一二合ばかりづつ遣はし申候。何よりも牛乳に超し候藥は之なしと存じ候也。なほく餘四磨はじめ、毎朝の水は、只今にても

*徳川三卿の一なる一橋家。齊昭の子慶喜、家を嗣ぎ養子とな

浴び候事と存じ候。もし浴び申さず候はば、浴びさせ申すべく候。さるかはり、湯はつかはせ申すまじく候。

二六 安宅

坪内雄藏

時しも頃は春のはじめ、風をほ寒き北國路を、いたはしや、義経は兄頼朝の疑うけ、奥州さして落ちて行く。主従僅かに十二人、辨慶を先達セダカに、山伏姿に身をやつし、日數程経て加賀の國安宅アサキの港に着きにけり。義いかに、辨慶、旅人等の噂によれば、安宅には特に關

文學者。遠藤と號す。早稲田大學名譽教授。

後鳥羽天皇の文治三年二月。

加賀國能美郡にありし關。

を設けて、山伏を嚴しく取調ぶる由、如何にすべきぞ。

辨「これはゆゑしき御大事なり。きつとこれにて御工夫あるべし。」

人々「いやく、何程の事かあらん。たゞ打破つて御通りあるべし。」

辨「いやく、打破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべく穩かなる手段を取りたし。」

義「然らば、辨慶、ともかくもその方の工夫に任せん。よろしく計らひくれよ。」

辨畏つて候。まづ考へ出したることは、我等かく山
 伏に身をやつせども、包み難きは我が君の御品格
 畏れながら、暫く強力に御身をやつされ、御笠深く
 召され、我等の笈を負ひて、わざと後にさがつて御
 通りあれかし。さなくば、忽ち見出され候はん。
 義げにく、これは尤もの事なり。
 姿をやつし、主従はやりやく關に近づきて、通らんと
 すれば、關の役人戸櫓左衛門、
 戸やあく、山伏。關なるぞ。名をなのれ。
 とぞ呼ばはりたる。

源頼朝
源義經



勸進帳の圖

辨承つて候。これは奈良
 東大寺建立の爲に、北陸
 道を勸進する山伏にて
 候。
 戸それは殊勝の事なれど
 も、山伏なるからは、この
 關は通し難し。
 辨して、そのいはれは、
 戸さればなり。鎌倉殿判
 官殿御不和により、判官

殿には山伏と姿をかへて奥州へ落ちらるゝ由ゆゑに、諸國に新關ニクセキを設けて、山伏をかたく止むるなり。一人も通し難し。

辨承つて候。併し、贗山伏ウソヤマブシをこそ止めらるゝならぬ。まことの山伏を止め給ふ必要は候はじ。

戸「あらむづかし。論より證據シロコトなり。まこと東大寺建立の勸進ならば、勸進帳のあるべきはず。こゝにてそれを讀みあげられよ。某これにて聽聞せん。」

辨「何と、勸進帳を讀めとや。心得申して候。」

もとより勸進帳のあらばこそ、笈の中よりあり合せの卷物一つ取出し、勸進帳と名づけつゝ、即智トクチを以て文を綴り、まことしやかに聲高々と天にも響けと讀上げけり。

戸「櫛つくづく聞きすまし、

戸「最早疑は晴れて候。御通り候へ。」

辨「かたじけなく候。」

げにや、紅は園生に植ゑてもまぎれなし。後に隨ふ強力を、戸「櫛目ざとく見とがめて、

戸「いや、暫く。その強力は通し難し。とまれ。」

と罵りぬ。すは、我が君をあやしむは、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ちどまる。

辨慶騒がず、そらとぼけ、

辨「やい、強力め。何とて早く通らぬぞ。」

巨「いや、それはこなたより止めたるなり。」

辨「そは又何故。」

巨「あの強力が姿、判官殿に似たるゆゑなり。」

辨「奇怪千萬。判官殿に似たりとや。しかいはる、

強力めは、一生の面目ならんが、さりとは腹立たしや。けふのうちに能登境まで行かんと思へば

こそ強力雇ひたるに、僅かの笈を重げに負ひて人に後るればこそ、貴人かとも怪しまるれ。憎さも憎し。いで、懲らしてくれん。

金剛杖をおつ取つて、さんぐに打擲す。

これはと驚く人々を辨慶目にて制しとめ、尙も烈しく打据ゑけり。戸櫓漸く疑念をとき、

巨「これは我等が誤なり。その強力には構ひなし。

とくく、一同御通りあれ。」

いふに、人々ほつと息、毒蛇の口を逃れし思ひ、さらばさらばと立ちあがり、關路をあとしづく、と、奥州

さして下りけり。(國語讀本)

*名は清。伊人、
小説家。

二七 雛祭の記

高濱 虚子

我が幼兒は去年の三月に生れたり。「ことしは初雛なれば、せめて内裏雛のみにも購ひくれよ。一度購ひ置けば、此の兒の一生あるものなれば。」など母なる人の切に望むに、やがて内裏雛と五人囃子とを購ひて與へぬ。幼兒よりも母の喜たとへんにもものなし。

奥の間の三尺の床に本箱を横たへ、机の抽斗を重ね、

三重許りの壇をしつらひて、例の内裏雛と五人囃子とを並べ祭るに、淋しげながらも目美しく、我はゆくりなくも、我が亡き親のこと慕はしく、しのばしくなりぬ。

膳・椀などの箱と共に棚の上に並べられたる一つの箱には、鼻の缺けたる紙雛、手足の無きはふこ様、去年のお煎りの紙に包まれたる、小さき箆笥の壊れたるを觀世捨にて括りたるなど、我はこれを雛様箱と呼びて、三月の節供が來れば、其の箱を直ちに臺として其の上に祭りて樂しみしが、隣の家の美しきを見て

歸りては、餘りに寂しく汚きに慊マカらず、母上に訴ふれば、男の子のするものにあらず」と叱られて、我に女の兄弟無きことの情なく、果ては我の女にあらぬことをさへ情なく覺えて、厚紙に金紙貼りつけ、之を雛の屏風なりとして、僅かに自ら慰なぐさめたる事など、今の如く思ひ出でぬ。

*正岡子規。

かゝる所に、子規シキ子の妹君より裸人形ハダカを幼き者にと送りこされたれば、五人囃子ばかりの淋しげなりしものも俄に引立ちて見え、そを内裏雛のいづれの側に置くべきかなど、三十近き男の詮議せんぎするもをかし。

其の日の暮、箆へら筒・長持・兩掛より鏡臺・茶箆筒・金盃・雪洞など、何れも美しく、新に壇を飾ることゝなりたり。桃の花も生けられたり。菱餅もお煎りも白酒も供へられたり。やがて、小さき雪洞に灯ともすに、雛の顔さへ光を増して、桃の花も俄に咲競ふかと覺え、五人囃子の鼓の音も今か響き出づらんと、たのし。幼き者の喜、母なる人の喜、さては髯男ヒゲオトコの我が喜、春色俄に三尺の廬いりに充ち満ちたるが如し。唯手足の無き古びたるはふこ様を此處に並べ見ぬことの物足らぬやう覺ゆるは、如何なる故にかある

らん。

ふるさとの雛戀しき都かな。(寒玉集)

二八 山彦

大隈言道

答へする聲おもしろみ、山彦を

かぎりもなしに呼ぶ童かな。

木の間よりいかに聞くらん、わらはへの

すさびにまぬる鶯の聲。

さし柳さして幾日も経ぬものを、

根ざし引き見る友わらはかな。

*福岡の人、歌人、
慶應四年歿す。

おのが身にまがふばかりになれる子を

猶はぐくめる親がらすかな。

先だちて山路すぎ行く牛の親に、

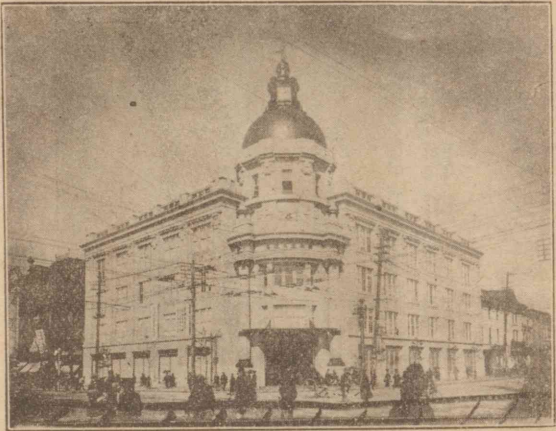
子牛より来る村時雨かな。

二九 豪商と碩儒

東京日本橋通に一際目立つ呉服太物の大店がある。白木屋といふ。その目の覚めるやうな店頭の裝飾は市中の花と呼ばれるくらゐ。遠近の顧客引きも切らず、店は日増に繁昌してゐる。

さて、此の店を開いたのは大村彦太郎といふ京都生
 れの人だが、彦太郎が故郷を去つて江戸に来て、呉服
 商となつたまでの話は、實に立志成功の美談である。
 殊に、彼と共に志を立て、成功を競うたのが、一代の
 名儒三輪執齋（シユンミツワノシヤウ）だといふは、愈以て珍しい話である。
 執齋は京都の醫者の子、六歳の時父に別れて、母方の
 一族大村某といふ商人の許に引取られた。この商
 人は即ち彦太郎の親父である。それで、兩人は兄弟
 同様にして育てられてゐたが、執齋（シヤウ）十八の春のこと、
 一日彦太郎に向つて、何時までも人の厄介になつて

*貞享三年。



現今の白木屋

居るも不本意なれば、一つ江戸に出て、思ふ存分やつ
 て見たいもの」と志のほどを
 明した。彦太郎もかね／＼
 同じ考を持つてゐたので、そ
 れでは一緒に出かけよう」と、
 相談忽ち一決して、さて、執齋
 は醫者か儒者、彦太郎は商人
 と、めい／＼志を立て、互に手
 を携へて江戸へ下つた。

東海道五十三次も大方通り越して、品川に着いた時、

執齋は彦太郎に向つて、さて、今までは互に助け合つて苦樂を共にして來たが、いよく江戸へ入る以上は、めいよく離れぐになつて、精一ばい働かねばならぬ。お互に大願成就は



大村彦太郎

十年先の事か、二十年先の事か、わからぬ。それまでは落着く處さへ定まらぬこと故、居所を知らせ合ふことも出來まい、まして往來することは迎も出來まい。ともかくも、こゝで別れて、五年後の今月今日の夜、日本橋の上で再會する

ことにしよう。」と語り出した。執齋も快く同意して、互に袂を別つた。時は貞享三年三月三日の事であつた。

僅か四年の歲月、徒に過さば夢とも過ぎよう。此の間に相互に負けず劣らず初一念を貫かうと誓つた二人の心は、さても殊勝なもの。かくて、執齋は「自己こそ一代の名醫とならう。大儒とならう。」彦太郎は「己れこそ一世の豪商と呼ばれてみせよう。」と、互に精限り根限り勉め勵んだ。執齋は其の翌年佐藤直方の門に入り、儒學を研究することゝなつた。この直

*剛齋と號す、江戸風指の儒者、享保四年歿す。

京都の大儒
天和二年歿す。

方は山崎闇齋の高弟で、當時の大儒であつたが、深く執齋の志に感じて、懇切に引立てた。そのお蔭で、執齋は學問も速かに進歩し、三年許りの間に先生の代稽古をするまでになり、上州前橋の酒井侯より客分として十人扶持を賜はることゝなつた。

元禄三年。

やがて、五年目の三月三日となつた。執齋は夕方中間を一人召連れて日本橋に行つて、彦太郎遅しと待ちうけてゐた。間もなく、彦太郎もまた番頭を一人連れて來た。五年前笠一つ杖一つで京都を飛びだしたこの兩人が、五年後の今日、各一僕を従へるだけ

の身分となつて、昔の約束のまゝに、日本橋の上に来て、互に心中を打明けた、その愉快はどんなであつた



三 輪 執 齋

らう。併し、兩人とも今は漸く成功の端緒に就いたばかりだと云ふので、互に居所も明さず、職業も告げず、更に三年後の再會を約して、またも

*元禄五年。

袂を別つた。さて、三年目の三月三日となつた。その夜半、二人は約の如く、再び日本橋の上に相會した。執齋は若黨二人、中間二人に箱提灯を點けさせ、身の

まほりいかめしく、堂々とおし出した。彦太郎もまた若者二人に小僧二人を従へ、いかにも豪商らしい扮装でやつて来た。この時、執齋ははや一かどの學者となり、前橋侯より三十人扶持を賜はり、他の大名にも澤山の門人ができて、其の名は儒者の間に高くなつて居た。そこで執齋は、年頃の志望先々成就した。今はお互に居所を明し合はう。といふに、彦太郎打領うちりょうき、いかにも。自分は最初通一丁目はじめとほいちりやうめに微かな小切店を開き、主僕兼帯しゆはくけんたいの一人で働いた居たが、段々と身代みしろを仕上げ、今では五十四人の男女を召使ひ、人に

江戸日本橋通一丁目。

も知られた吳服商となつて、屋號を白木屋と呼んでゐる。と答へた。かくて、兩人は改めて兄弟の契を結び、彦太郎の方二歳上なればとて、兄と定めた。白木屋の祖先は即ちこの彦太郎で、爾來子孫相繼ぎ、二百餘年の今日まで家運益榮えて居る。(實業補習讀本)

三〇 樂しき我が家

私の家は、町の中ほどに在つて、今は兩親と祖母、それに兄弟五人、都合八人の家族である。父は五十の坂を越した白髪交りの老人で、常に、人は

兄弟五人
上の兄
すの姉
次つぎの姉
小こさい兄
自分おれ
妹いもうと

正直が何より大切だ。と口癖の様にいはれる。植木が好きで、家業の餘暇には花鋏や如露を手にして居られる。母は几帳面で、朝から晩まで寸時も休まず、吳服商賣の合間には裏の畑に野菜も作られる。上の兄は、一昨年の商業學校の卒業で、何事もよい加減といふことが大の嫌、不徹底、不徹底といつて叱られる時は、本當にこはい兄さんだと思ふこともある。次の姉は、やさしいたちで、裁縫が好きで、上の姉がかたづいてからは、何時も母の手助や、兄弟の身のまはりの世話をしてくれる。

正直一途な小さい兄は、十二里先の師範學校に這入つてゐる。妹は何事にも辛抱強く器用で、私にはとても出来さうもない手仕事を、根氣よくする。そして拵へ上げて父母に見せては褒められてゐる。不器用な私はほめられたためしが一度もない。一番貴ばれて又一番人の好いのは祖母で、そして私のいふ事は何でも聽いてくださる。八人の家族が波風激しいと聞く此の世を、毎日實に平和に暮してゐる。夕飯の折などは大きな食卓を圍んでずらりと並び、皆にこくして色々な話をし

ながら睦じく食事を済ます。かういふ時には嚴格な兄も實にやさしい兄さんである。食後は夫々用があるので二三時間は本當に静かであるが、その中自然と茶の間に集つて來て話がはずむ。いつの間にか十時になる事もある。その中一人減り二人減り、銘々自分の臥戸ドに入つて安らかな夢を結ぶ。晝間のうちは皆が受持の仕事をせつせとする。私の割當は、歸宅してから部屋々々の掃除、庭掃除。そんなことでも、父母は子供等の爲にどれ程助かるか知れないと喜ばれる。私はそれを聞く度にもつと

もつと手助をしなければすまないと思ふ。庭は可なり広い。そこには檜ヒノキの木や椎シデの木や其の他の木が高く風に嘯ウツクいて聳タテマえてをる。運動も自由に出来る。立木を利用してぶらんこも出来る。父の丹誠は四季をりくくの美しい花になつて我等を楽しませる。この頃は盆栽の紅梅が盛である。海棠カキの蕾も大分ふくらんで來た。

